



水であそぶ(ひよこ組)

～水の不思議や心地よさを感じて～

暑さの厳しい7月、8月、子どもたちも水の冷たさを求めて遊ぶ季節です。ひよこ組さんは、小さなバケツや低い容器に水を入れてあげると、すりばいで少しずつ前に進み、触ってみたい！！というように、手を伸ばして、水の感触を感じています。

様々な水遊びをやることで、水の不思議や、水の特性を感じたり、心地よさを感じたりしながら、小さい頃から水に親しんでいる子どもたち。水の刺激によって、感覚機能が育ち、皮膚も丈夫になることが言われているように、健やかな心身の発達にもとても大切なものです。暑さを感じて汗腺の発達を促しながらも、水でたくさん遊び、たくましい体作りをしていきたいところです。

ホースから出る水

出てくる水をじーっと見つめ、触ってみたり、ホースを自分の手で持って、水を操作する感じを感じています。



スポンジの水

ギュッとすることで、水が出てくることを知って自分の手でやってみようとしています。ふっても水がでるということを知って、やってみたり、見て面白がったり！



ビニール袋の水袋

手の平で叩いたり、口元に持って行ったり、ギュッと握ってみたり、こねこねとしてみたり。逃げない水の感触も楽しんでいます。



コンテナの中の水

水の貯まったコンテナにそっと入って、ひゃっとした感触を感じています。



水道からの水

水の流れる勢いに手を伸ばすと広がるということを知っていたようです。



ヒトの子もまた、この世に生まれるまでの十月、この太古の海である羊水のなかで育ってきた。全身の皮膚感覚で“水”を感じてきたのである。まだ、本能の部分の力の大きい子どもが、ひたすらこの“水”を恋しがるのも当然といえるかもしれない。

この“水刺激”が皮膚の感覚をとおして幼い子どもの脳におくられることの重要さが、最近、医学的にも教育心理学的にも叫ばれるようになってきた。小さいとき、この皮膚からの水刺激を(足裏からでもよい)たっぷり受けた子どもは自律神経がたくましく育つというのである。自律神経とは、生きる力を支配しているところである。薄着で戸外の風にあたり、水たまりにはいって遊ぶことで自律神経がたくましくなり、虚弱な体質、アレルギー体質、ぜんそくなどもなおしていくということがわかってきたのである。

～『ヒトが人間になる』さくら・さくらんぼ保育園の365日～

本物との出会い(りす組)



～「セミ」を身近に～

夏本番、園庭にセミの鳴き声が響きわたりました。ある日、生命いっぱい鳴いていたセミが死んでしまい、落ちてきていたのを、上のクラスの子が手にして、それをりす組さんの子に手渡しして見せてくれました。りす組の子どもたちは、動かないということが分かると、触ったり、手の平にのせてみたりする姿がありました。ある日、セミが弱っていて、木から下へ落ちてきました。動かないかな?と思い、そっと手を伸ばして触ろうとしますが、セミの足が少し動いたことで手を引っ込める子どもたち。じーっとセミの姿を見つめていました。一人の子が勇気を出して、手を伸ばしてつかもうとすると、パッと飛び立ってしまったセミ。ですが、木の低い位置に止まったので、追いかけていき、木に止まったセミを間近で見ることができました。近くにアブラゼミも止まっていて、取ってみようと手を伸ばす子の姿も。何力所かにセミが飛んできて、みんな低い所に止まるので、子どもたちもセミを追いかけてその姿をじーっと見ることができました。子どもたちも興味津々で真剣な表情!最後には、高いところに飛んで行ってしまったので、保育士が「どこにいったかな?」「セミーー!」と叫ぶと、子どもたちも木の上を見つめて、「セミーー!!」と叫びました。そして、『セミ』の歌を歌うと、子どもたちも木の上を見ながら、歌を口ずさんでいました。

本物のセミとの出会いで、驚いたり、喜んだり、心を踊らせたりと、感性が育まれ、「セミ」の歌が実物と繋がったのを感じた場面でした。



災害に備えて・・・

8月に、宮崎県日向灘を震源とする大きな地震がありました。非常に大きな地震でびっくりしましたが、日頃の避難訓練の成果もあり、子どもたちも職員の話をよく聞いて避難することができました。今回の地震により、霧島市内各所の水源に濁りが確認され、数日間は市水の利用を控えることになりました。園では、井戸水を地下70メートルから汲み上げており、普段の子どもたちの遊びや水遊びにも利用しています。水質検査を行った際にも市水道とほぼ同じ数値で飲料可でありますので、この数日間は、井戸水で手洗いや調理に使ったりと利用していました。このような災害の時に、井戸水があることが子どもたちにとって、とても良かったと感じました。

7月には、大雨や洪水、台風などを想定した風水害の訓練も行いましたが、その際に、園で保管している「防災リュック」の中身を子どもたちにも紹介しました。水のペットボトルや、簡易トイレ、懐中電灯や乾パンなど生きるために必要なものがどんなものかを伝えました。

今回の自然災害を受け、日常ではないことが起きたときに、普段の生活が不便なくできていることのありがたみに気付きますが、日頃から、自分の命を守ることや食べ物や資源を大切にすることなど、生活の中で子どもたちと一緒に考えていきたいです。

～ご家庭に使わなくなったオムツはありませんか?～

園の防災リュックの中身にオムツが不足しております。ご家庭にサイズアウトしたオムツや、使わなくなったオムツが残っている方がいらっしゃいましたら、園で使わせていただけないでしょうか。ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。



悠久の森（きりん組）



～自然の不思議・偉大さを感じた夏～

8月の台風等の影響で延期になっていた川遊び。9月になりようやく、夏を締めくくる楽しみとして「全国遊歩百選の地」に選ばれた自然豊かな遊歩道を歩いて、大川原峡悠久の森へ川遊びに行きました。川遊びにはこのような目的を持って行きました！

- ・身近な自然との「違い」にふれる。
- ・水の流れを感じてみる。
- ・自然の中での「素敵なもの」を発見し、伝えあう。

さあ、どんな素敵なものが発見できるのか、川の水、私たちの住んでいる地域とはまた違う自然の中で、何を子どもたちが感じるのか、楽しみに出発！

滝の涼しさを感じて

悠久の森の入り口を歩いていくと、右手に見える滝。子どもたちも足を止め、滝の近くで心地よい涼しさを感じました。水が落ちてきているところが、「なんでぶくぶくになっていた水なんだろう・・・？」とよく水の姿を見ている子、それに対して「滝の落ちるスピードが速いからだよ」と答える子もいました。どうしてひんやりするんだろう。。というギモンに対して、「細かい粒になってとんでくるから涼しいんだよ」と考えて言う子もいました。上から見たときに、ちょうど虹も架かっているのを見ることもできました(*^_^*)

川の水の色が違う！！

川に着くと、最初は川の水が冷たいという反応でしたが、勢いよく川へ入っていく子どもたち。流れが緩やかな場所に、水の色が違う深い所があり、「なんであそこだけ緑なの？」とギモンの声がありました。実際に行ってみると、他の所よりも深く、深さで川の水の色が違うことに気付くことができました。深いところは、ちょっと怖いけど入りたい思いがある子は職員に捕まって遊んだり、バシャバシャと顔をつけて思い切り泳いだり。

いろいろな大きさの石で遊ぶ

浅瀬では、石の形を見て、「ハートだ！」と、普段見ている石とは違って、つるつるしていたり、丸かったり、様々な色や形があることに気付いて、探す子もいました。また、水の流れをせき止めようと、石を積んでいた第2のきりん組さんの遊びに興味をもって、一緒に石を積んでみる子どもたち。小さな石では川の流れに負けて流されてしまうのを、なんとか流れに打ち勝とうと、石を運んできて、うまくはめ込んでいく子どもたち。試行錯誤と力をつかひながら、夢中になって遊ぶ姿がありました。

カニの不思議

例年、この川にたくさんいるカニ。9月上旬ということもあってか、なかなか姿を見せてくれなかったため、職員がようやく一匹のカニを発見し子どもたちに見せました！見つけたカニは、片方のハサミだけ大きくて、「なんで片方だけ大きい？」と不思議を感じている子どもたちでした。（8月初旬のときのカニは同じハサミだったのですが・・・！）「大きい方のハサミで敵を捕まえて、小さい方のハサミで攻撃するんだよ！」と考えたり、「あかちゃんのカニにはハサミがないよ」と気付いてたりしていました。ハサミが大きいので、触るのをためらう子もいましたが、カニの持ち方を教えてあげると、カニを触ることが出来た子もいました。

見つけたカニのお家をつくろう！と、石で囲んでカニのお家づくりが始まり、石の下にカニが隠れることを知ったら石の下を探してみ、捕まえたカニをお家に入れて遊んだり。1匹だけ卵を持ったカニも見つけることができました！

川は楽しい、でも怖さもある

遊んでいる中で、履いていたスリッパが川の水に流される子がいました。どんどんどんどん流れていくので、川の中ではなかなか追いつきません。職員がなんとか取ることができましたが、「川の流れは速いんだ」ということ、深さもあるし、楽しいけど怖さや危険もある、ということに気付けたかなと感じました。

翌日、川遊びの振り返りをしました！

子どもたちに、川遊びを振り返り、心に残ったことを発表してもらいました。その中で、「カニ」の生態について興味を持ちはじめた子。「カニはなんで横にしか歩けないのかな」「カニは足の足がたくさん横にあるのかな」「なんで体が硬いのかな？」「敵からを守るため？」「なんで片方だけハサミが大きかったんだろう」など、いろいろなギモンが出てきました。

生き物は好きなきりん組さんでしたが、今回様々な不思議が出てきたことで図鑑を使って調べてみよう、お家の人に聞いてみよう、と、「なんで」を知ろうとする意欲が生まれてきたように感じます。子どもたちの描いた絵からも、川遊びで心に深く残った場面がたくさん表れていて、年長の夏の貴重な実体験になったのだと感じました。今回の体験を一つのきっかけとして、子どもの思いやつぶやきを、また普段の生活や遊びの中に結びつけて、より楽しい遊び、学びにしていきたいです。



子どもたちの生活や遊びのほとんどが学びにつながっていること、幼児期は、決して就学のための準備期ではなく、自らの体験を通して身につけていく「生涯における学びの土台が築かれる時期」である（中略）……。また、人が育っていくには、知性と感性の両輪がバランス良く育っていくことが大切です。しかし、今日では知識の車輪が、早期教育や知識の詰め込みによって大きくなりすぎて、感情や心が育まれる車輪が極めて小さくなっています。

（中略）今こそ、子どもたちが夢中になって遊べる環境（十分な時間と空間、遊び仲間）を保護者と一緒に取り戻していかなければ、意欲的に学ぼうとする芽は育ちません。（中略）小中高生の子どもたちに「学びたいという意欲」が湧いてこないのは、与えられすぎて、その大事な芽が消失してしまったのだと思います。

～『遊びこそ豊かな学び』今井和子著～

前回の園便りでも、幼児期に育みたい資質や能力、そして幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿についてお伝えしました。私たちは、子どもたちが生活の中で夢中になって遊んだり、考え、工夫したり、友達と一緒に協力してその達成感や喜びを共有したり、と意欲的に遊ぶ子ども、その環境を工夫して保育をしています。夏ならではの体験、暑さに負けず自然とふれあい得られた貴重な体験、子どもたちの心にしっかり残り、それが就学してからの学びと深く繋がっていくと信じています。

～幼児期に育みたい3つの資質・能力～

- 1 知識・技能・・・気付くこと、できるようになること
- 2 思考力・判断力・表現力等・・・考えたり、試したり、工夫すること
- 3 学びに向かう力・人間性・・・粘り強く頑張ること

そして、この資質・能力の根底には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」があります。

～幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿～

- ① 健康な心と体
- ② 自立心
- ③ 協同性
- ④ 道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤ 社会生活との関わり
- ⑥ 思考力の芽生え
- ⑦ 自然との関わり・生命尊重
- ⑧ 数量・図形、文字等への関心・感覚
- ⑨ 言葉による伝え合い
- ⑩ 豊かな感性と表現